

## トピックス 新師範2名誕生！

11月2日（日）に本部道場で開催された師範審査会において、私の担当している、東大島鶴の会の菊地保さんと亀戸スポーツセンター教室の星野幸代さんのお二人が師範に合格されました。おめでとうございます。お二人とも長らく楊名時太極拳を勉強され、それぞれにご病気や体調不良の時期などを乗り越えて、ついに師範位に到達されたものです。ご紹介してお祝い申し上げますとともに、今後のますますのご精進を祈念いたします。

【写真は審査会場での記念撮影 左星野さん・右菊地さん、】



| 1



## 瑞江鶴の会・

### 東部区民館祭で舞台表演

江戸川区の『第38回・東部区民館祭』が11月9日（日）に開催され、瑞江鶴の会は例年通り舞台上で甩手、八段錦、二十四式太極拳を演じて、楊名時太極拳の素晴らしさを観客にアピールしました。

## 総合文化センターで太極拳体験講習会実施

さる11月23日（日）、江戸川区総合文化センターで開催された江戸川サークル連合会の「第38回発表会」において、初めて「健康太極拳体験講座」が組み込まれました。

約45人が参加されましたが、初体験の方も多く、ご覧のような体験講習会となりました。近くの楊名時太極拳教室の先生方生徒さん方のご協力もあって盛会裡に終えることが出来ました。



## 東京ブロック下期研修会に参加

11月24日（祝）には、台東区リバーサイドスポーツセンター体育館第2武道場において教室担当者、同アシスタントを対象とする『東京ブロック平成26年度下期研修会』が開催されました。当日は楊慧先生を講師にお迎えして、約215人が参加しての大研修会となりました。担当する瑞江鶴の会からも、アシスタントの師範5名が参加しました。小生と宇留野良子師範は支部研修委員会の一員として、企画段階からお手伝いをさせていただきました。詳細は次号でご報告します。

## 「太極拳なんでも勉強会」のご案内

本年4月から始めた第2期・太極拳まるごと勉強会も無事11月をもって終了いたしました。継続を望む声もあり、来年1月から以下のような要領で、新しいテーマと内容で「太極拳なんでも勉強会」を設営しましたので、ご案内いたします。なお、「第3期・太極拳まるごと勉強会」は新規受講者を対象にして来年4月から夜間コースで設営予定です。次号で詳細をお知らせいたします。

会名； 「太極拳なんでも勉強会」（新規テーマによる）

開催日； 2015年1月から12月まで。毎月1回。全12回。

場所； 船堀タワーホール会議室

時間； 第2水曜日 午前10時から11時30分まで。1時間30分。

テーマ； 参加者の希望するテーマ（知りたいこと、聞きたいこと、ともに考えたいこと）＊  
ただし、1, 2月は小生が選んだ以下のテーマで準備します。

1月 「息ほど安いものはない～呼吸の科学非科学～」

2月 「肥大化する欲望～腸管・心臓・脳～」

会費； 1回当たり500円。

対象； 楊名時健康太極拳愛好者ならどなたでも。

＊これを優先的に取り上げてゆく方針です。テーマの範囲はとくに決めませんが、お互い楊名時健康太極拳の信奉者、愛好者として、共有できるテーマなら何でも結構です。

## 閑人閑話 法輪（輪宝）のいわれを辿ると！



法輪とか、輪宝と聞くととはてなと思われる方も、左の画像を見ればすぐわかりますね。仏教、仏法の象徴である法力を持つシンボルマークとされています。これはたまたま麻布の某寺の扉を写したのですが、どこでも見られるものです。まだ仏像というものが存在しなかった昔から、法輪は仏教のシンボルマークであったわけですし、転法輪という言葉は「仏教の教義を広める」という意味でもあります。



では、法輪はお釈迦様の発明品、仏教の専売品かというのと、そうではないのです。お釈迦様（紀元前 462～383）が生存し、仏教を説いた時代よりずっとずっと昔から、アーリア人が広く用いていたシンボルマークであるのです。

「法輪」はサンスクリット語ではチャクラ（あるいはチャクラム）と言い、円、車輪を意味します。

チャクラには二つの重要な意味があります。一つはヨーガ（インダス文明が起源、のちにアーリア人が取り込んだとされる。）でいう人体の中枢を為す7つのチャクラ【写真右上】のことで、



二つは円形の武器のことで、古代インドで用いられた投擲武器の一種で、真ん中に穴のあいた金属製の円盤の外側に刃が付けられているもので、この方をチャクラムと呼ぶこともあるようです。近代までインドのシク教徒が使用していた画像【左。19世紀】もあります。



そして古代インドの神話では、このチャクラ（ム）を武器にしている神様、つまり現代でいうとヒンズー教の神様、がじつに多いのです。代表的なものをご紹介します。ヒンズー教の3基本神の一つが繁栄維持を司る「ヴィシュヌ」【右画像】ですが、4本の手があって右上手に持つのがチャクラです。ちなみに右下手には棍棒を、左上手には悪人が悶絶するような大音響を発する大法螺（“大ぼらを吹く”の語源だそうです）を持っています。左下手には武器ではなく、清純と聖性の象徴である蓮華を持っているので、これで少し救われますね。

（この文章は、2015年1月の開催テーマ「息ほど安いものはない～呼吸の科学非科学～」に関連して書かれました。）

（この文章は、2015年2月の開催テーマ「肥大化する欲望～腸管・心臓・脳～」に関連して書かれました。）

3基本神のもう一つは有名なシヴァ神です。彼には多くの神妃、化神がいますが、殺戮や戦いの女神としてはカーリーとドゥルガーが強烈です。カーリーの画像は恐ろしすぎるのであえて紹介しませんが、美人のドゥルガーが“にっこり笑って”悪人を殺す場面が右の図です。肉感的な10本の腕のそれぞれにすごい武器を持っていることが分かりますか？右の第二手に持つのがチャクラです。



これらのヒンズーの神々が仏教の千手観音菩薩のモデルになっているとされています。梵名の「サラスラブジャ」とは“千の手”の意味であり、同時にヴィシュヌ神やシヴァ神の異名でもあるからです。千手観音ももちろんこれらの神像が持っている以上のありとあらゆる武器を携えています。

話をアーリア人に戻しますが、彼らは紀元前15世紀ごろ西方から北インド、インダス川流域に侵入してきて次第にガンジス川流域までも支配するようになったとされています。非常に優秀な民族であり、スポーク付きの車輪を発明し、馬に曳かせる高速の、いわゆる「ラタ戦車(馬車)」を、長距離の移動手段として、また強力な武器として、イランもそうですが、四辺に勢力、支配を広げていったとされています。その「ラタ戦車」の象徴として、「チャクラ」が使われてきたということのようです。

そもそもアーリアというのは“高貴な”という意味だそうですから、自らそう名乗って、バラモン教による政宗一致の統治方式で、インドの既存の多数の民族を従わせていったというのが、アーリア人の正体、インドの歴史ということなのです。

ちなみに現在のインド【総人口12億1,057万人(2011年国勢調査)】の宗教別人口比率は以下です。

ヒンズー教徒 80.5%、イスラム教徒 13.4%、キリスト教徒 2.3%、シク教徒 1.9%、仏教徒 0.8%、ジャイナ教徒 0.4% (2001年国勢調査)

多民族国家で、憲法で公認されている地方言語が21あるといいますが、事実上カースト制度も残っているという国ですから、国家運営はたいへんだと思いますが、右のインドの国旗はいみじくもそのあたりに配慮して、上のサフラン色がヒンズー教を、下の緑色がイスラム教を、中間の白がその他の宗教、ならびに宗教間の調和を意味し、そして中央にチャクラ(法輪)が置かれているデザインとなっているものです。



さこうべん

## 左顧右盼(再開)

【第17話 漢詩に学ぶ・漢詩を楽しむ】

### 第4回 辺境の歌~その1

中国は、つねに北や西の異民族の侵入に苦慮していました。唐の時代もそうですが、異民族との戦いに明け暮れていました。多くの将兵たちがはるばると遠征し、あるいは長期にわたって辺境の城塞にこもって戦っていました。おのずと特別の感慨がわき、それが名歌となって残ったわけです。いくつかの詩をご紹介します。

まずは送別の歌として最も有名な「元二の安西に使いするを送る」(王維)をご紹介します。

送元二使安西

元二の安西に使いするを送る

おうい  
王維 (699~759)

渭城朝雨浥輕塵

いじょう  
渭城の朝雨 軽塵を浥し

(渭城; 秦の首都「咸陽」のこと。長安の郊外)

客舎青青柳色新      客舎青青 柳色新なり      (客舎；宿舎)  
 勸君更盡一杯酒      君に勧む 更に盡せ一杯の酒  
 西出陽関無故人      西のかた陽関を出れば 故人無からん      (陽関;玉門関の南に位置する砦)

これは「元二」という人が遠く安西都護府へ旅立つのを長安郊外で見送る歌です。安西都護府とは征服した異民族を統治する最前線の役所で、このころはタクラマカン砂漠の中のクチャに置かれていたそうですから、まさに水杯を交わすという景であったと思います。

**涼州詞**                                      **涼州の詞**                                      <sup>おうかん</sup>**王翰**      (687? ~726?)

葡萄美酒夜光杯      葡萄の美酒夜光の杯  
 欲飲琵琶馬上催      飲まんと欲すれば琵琶馬上に催す  
 醉臥沙場君莫笑      酔うて沙場に臥すとも君笑うこと莫<sup>なか</sup>れ  
 古来征戦幾人回      古来征戦幾人か帰る



【玉門関 2005. 07 撮影】

涼州は現在の甘肅省武威県あたり、蘭州の西北、嘉峪関の東南、つまり河西回廊の中央部。このあたりの流行歌「涼州歌」(遊牧民族独特の旋律)に合わせて作詞されたもの。王翰はこの一歌のみで名を遺していますが、実際に現地へ行ったことはなかったとされています。日本でも「憧れのハワイ航路」とか「サンフランシスコのチャイナタウン」なども同じです。やはり現地を知らずに情報と想像だけでうまく作った歌なのですね。

ちなみに葡萄酒はまだ西域諸国からの輸入品であった時代です。夜光杯はペルシャ製のガラスの杯であったのでしょうか。

【クチャ・スバシ故城 2000. 07 撮影】

漢の武帝の時代から西域への進出が始まり、西へ西へと版図を広げていったのですが、つねに匈奴との熾烈な攻防が繰り返されていたのでした。



同じく盛唐の詩人、岑参(しんじん)は節度使の部下として、玉門関を越えてタクラマカン砂漠のウルムチ、トルファン、クチャ(亀茲国)あたりまで遠征した経験を有名な「磧中の作」で詠っています。(磧；石の多い砂漠の意。ゴビ灘と同じ)

**磧中作**                                      <sup>せきちゅう</sup>**磧中の作**                                      <sup>しんじん</sup>**岑参**      (715~770)

走馬西来欲到天      馬を走らせて西来し天に到らんと欲す  
 辞家見月兩回円      家を辞してより月の兩回円かなるを見る  
 今夜不知何処宿      今夜知らず何れの処にか宿するを  
 平沙万里絶人煙      平沙万里 人煙を絶つ

(以下次号に続く)

**旅をうたい拳を詠む**                                      **秋は闌けゆく**

香りきて探せばほろりちさき花金木犀の咲き始めたる  
 月食の終われば高く中天にいよよ輝く満月となる  
 彼岸花も金木犀も散り終えて蒼天高く絹雲のゆく